

トピック

2010年口蹄疫被災地の畜産の現状

末 吉 益 雄 (宮崎大学)

Sueyoshi, M. (2012). The current situation (2011) of animal husbandry of Miyazaki where foot-and-mouth disease occurred in 2010. *Proc. Jpn. Pig Vet. Soc.* 59, 31-33.

キーワード：宮崎、口蹄疫、農場再開率、頭数復帰率

2010年4月20日に口蹄疫疑似患畜の発生報告があり、壮絶な約130日間に及ぶ口蹄疫との闘いが始まった⁶⁾。防疫作業中に、被災した生産者との会話で、怒り、不満、あきらめ、虚しさあるいは将来への不安などが重くひしひしと伝わってきた。再開のことはまだとても考えられる余裕はなさそうだった5月、養豚の再開に向けて、「今まで、オーエスキー病（AD）の清浄化がなかなかできなかったけど、今回の惨状を逆手に、今はADだけでなく豚繁殖・呼吸障害症候群（PRRS）もフリーだから、導入と農場のバイオセキュリティをしっかりと守れば、もしかしたら、サルモネラもフリーにできる日本一クリーンな養豚地帯が実現するのでは。再生ではなく、新生。」と提案⁵⁾したところ、農場の方々ばかりでなく、同行した獣医師の瞳までもが輝き、顔の表情が朗らかになっていく様子を今でも鮮明に覚えている。その時は、まるで地獄図さながらの現状への同情よりも、将来への希望の方が被災者の心の支えになったと実感した。

7月5日に全ての埋却処理が終了し、7月27日に移動制限解除、8月27日に終息宣言、8月31日から「観察牛」導入が開始され、10月6日にOIEへ「清浄国復帰」の申請手続きがなされ、2011年2月5日に清浄国復帰した。旅行者の行き来が盛んな隣国の韓国、中国や台湾では、依然として口蹄疫ウイルスの動きが見られる中、日本では清浄を維持している。

2010年の口蹄疫発生で、1,362戸の農場から家畜297,808頭の姿が消え、被災農場の再開希望者は80.6%（2010年9月）に留まった。同年11月29日、口蹄疫被災地で初めての子牛が誕生し、2011年4月14日に初めての子豚が誕生し、そのことは地元新聞にも掲載されて祝福された。被災農家は周囲からの応援にも元気づけられたが、実際に家畜を飼い、その鳴き声に

よって最も元気づけられた。口蹄疫の被災を経験して、命の尊さを学び、畜産を担う精神は将来の担い手である若者の心にも確実に刻まれた⁴⁾。

2011年5月31日時点で、農場再開率は54%、頭数復帰率が40%である（図1）。農場再開率と頭数復帰率の種別では、肉用牛がそれぞれ54%、37%、酪農が83%、63%、養豚は44%と40%である¹⁾。酪農の再開率が最も高くなっている。市町別の農場再開率と頭数復帰率³⁾は、被災農場数と各家畜頭数が市町間で大きく異なり、一律に比較できないが、児湯郡4町（高鍋町、木城町、川南町、都農町）、えびの市と日向市の再開が遅れている（図2、2011年4月20日現在）。えびの市では、5戸が被災し、うち2戸は廃業の予定である。また、1戸については場所を移転して再開する予定である。川南町の20年間継続してきた一養豚場例では、再開するために家畜排泄物浄化槽の設置が必要だが、融資額の返済の見通しが立たないため廃業を決意した。

口蹄疫被災地で往診する臨床獣医師だけでなく、県内の各地域で、獣医師は農場訪問の方法を衛生的見地にに基づきながら模索し、往診を再開している。しかし、畜産に密接に関連する事業についてはその需要が減り、獣医師の収入は激減している。牛の場合、口蹄疫の発生前、多い場合には20件／日あった往診が口蹄疫発生後には2、3件／日に減っている。また、引退を決意した人工授精師や削蹄師もいる。2011年8月27日現在、1,238農家（回答数）のうち、再開できたのは肉牛599戸、酪農45戸、養豚60戸の計704戸で、農場再開率は57%と着実に高くなってきている²⁾。しかし、再開戸数は期待したよりも伸び悩んでおり、最終的にも2010年の発生前の飼育頭数には到達しないと予想される。それは、計画的に家畜飼養密度を抑え、新しい畜産経営を町ぐるみで取り組んでいる地域もあることが背景としてあり、元の飼育頭数に戻ることが必ずしもベストではない。安定的な畜産経営の維持が最終の目

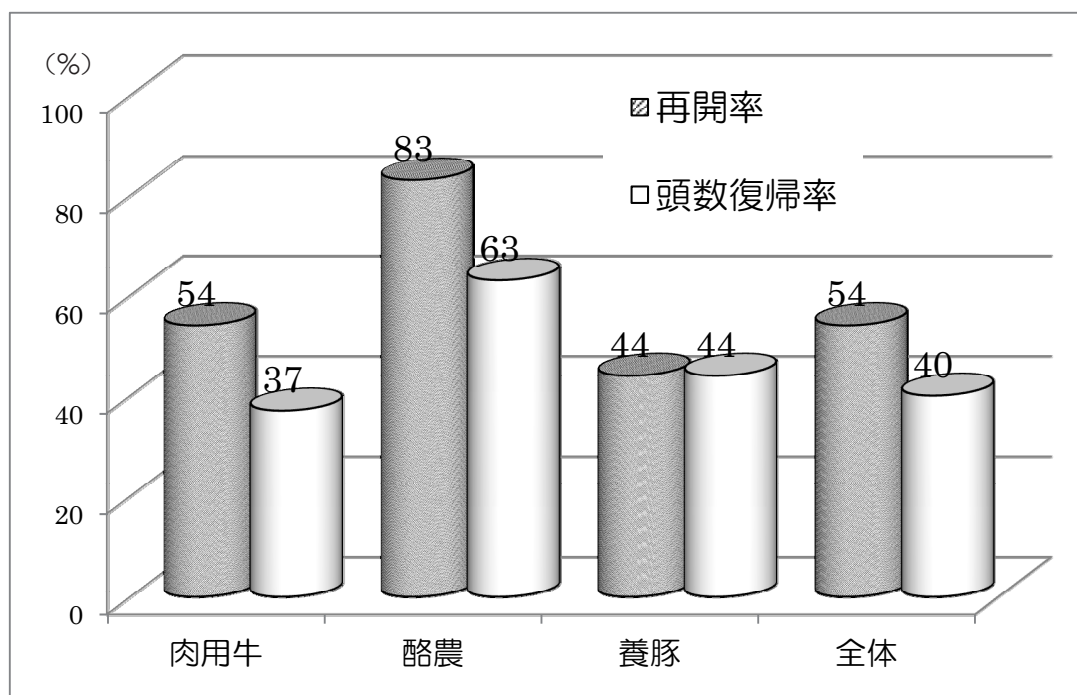


図1 農場再開率と家畜飼育頭数復帰率（2011年5月31日現在）

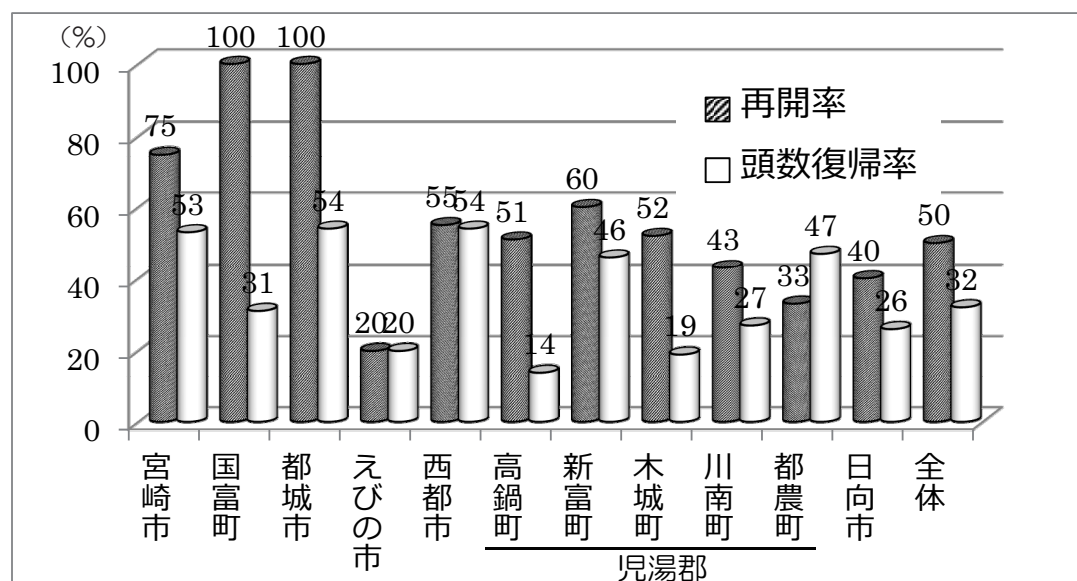


図2 市町別農場再開率と家畜飼育頭数復帰率（2011年4月20日現在）

標である。

口蹄疫発生による被害は畜産関係者だけではなく、広い範囲にその影響は及んだ。児湯郡川南町は経済的に畜産への依存度が高く、口蹄疫発生で「町が消滅した」と例えられた。だが、口蹄疫の終息宣言後は徐々に復興への兆しが見え始め、2010年9月26日には休止されていた「全国三大軽トラ市」に数えられる川南町の中心部商店街で、毎月第4日曜に開催される朝市「トロントロン軽トラ市」が6カ月ぶりに開催され、約1万5千人の人出で賑わった。これも復興への一歩であ

る。この活気を継続させるためにも、家畜伝染病の防疫に十分留意していかなければならない。

宮崎県畜産・口蹄疫復興対策局の呼びかけで、2011年7～8月に大学、関係団体、生産者代表（肉用牛、酪農、豚）、地域代表、県畜産行政関係が集まり、家畜の適正飼養密度（農場内の家畜頭数密度と地域の農場密度）と規模について家畜防疫、生産性の向上、持続可能な畜産を考える観点から意見交換がなされた。集会ではいろいろな意見が述べられた。

① 健康家畜を導入するだけでなく、その健康を維持

しなければならない。そのためには、普及員、剖蹄師、人工授精師、獣医師、畜舎等修理業者、飼料業者、レンタル業者、敷料・堆肥業者などを対象に講習会を定期的に開催し、参加のポイント制を設け、積極的な参加を募る。

- ② 家畜を生き甲斐で飼うのではなく、動物を飼うには責任があることから、畜産経営には届け出制あるいは資格制度も考えた方がいい。
- ③ 養豚業界は、「新生」を目指し努力しているが、養牛業界は新生から「復興・復旧」に目標が変わり、防疫態勢も元に戻っているところもある。牛と豚の業界は歩調を合わせて、バイオセキュリティに取り組まなくてはならない。
- ④ 宮崎県が推進している「20日は消毒の日」は誤解を招いているところがある。勘違いして、月に一度消毒すればいいと思っている農家がいる。消毒作業は常日頃からする必要がある。
- ⑤ しっかり消毒するために、専門の代行業者あるいは消毒の専門的チェック体制を強化した方がいい。
- ⑥ 新生に向けた取組で、豚の発育状態は良好で、約140日齢で出荷体重に到達しているものもいる。その理由は、飼養密度が低いのに加え、ADとPRRSがフリーのためだと考えられる。
- ⑦ 2010年の口蹄疫発生以前の川南町では、約90km²に350農場があり、167,571頭の家畜が飼養されていた。すなわち、農場密度が約3.9戸/km²で、家畜飼養密度が約1,862頭/km²であった。家畜伝染病に対する防疫上のリスクが高いのは理解できるが、この高密度を緩和するために、再開場所の早急な移転は現実では難しい。
- ⑧ 将来的に、アニマルウェルフェアに基づいた新しい畜産形態を目指す。

また、埋却地の各農場敷地内確保は重要である。しかし、個人で準備できないのであれば、共同埋却地の準備を自治体あるいは国が準備する必要がある。さらに、密閉式動物輸送トラックの準備も必要となる。

宮崎県は口蹄疫および高病原性鳥インフルエンザともに二度経験した。そのため、宮崎県は悪しき「易汚染」のレッテルが貼られている特別な地区となっている。防疫について、「他県がしていないから、宮崎でもしない」は通用しない。汚名返上のためには、農水省の指導をより強化した家畜高密度地域の参照となる「家畜伝染病防疫宮崎モデル」を発信すべきである。例えば、宮崎県検疫システムとして外国人や海外渡航者

の農場訪問については、検疫期間（ダウンタイムとして48時間）を設定し、家畜飼養地から離れたホテルや温泉宿で前泊を求めるなどである。また、牛の飼料や敷料でもある稲わらは地産地消を目指すべきである。

宮崎県の家畜頭数と家畜保健衛生所の獣医師数の比率を他都道府県と比較すると、宮崎県では獣医師数が大幅に不足している。中期的計画を立てて獣医師を増員させ、かつ家畜の飼養頭数が多い小林市周辺には家畜保健衛生所の新設も考えるべきである。

おわりに

新生養豚プロジェクト協議会の野津手重人会長（享年41歳）が2011年9月26日に逝去された。「ADとPRRSフリー養豚地域づくり」の大黒柱であった。突然の他界で、無念でならない。口蹄疫への怒り、苦しみ、無念さという地獄から同士とともに、這い上がり、養豚の新生を牽引していた故人の強い意思を、今、ここに再確認し、子孫に誇れる畜産を築くことを誓う。心よりご冥福をお祈りいたします。合掌。

引用文献

- 1) 藤井麻衣子、江原枝里子(2011)宮崎県における口蹄疫からの復興への取組み. <http://lin.alic.go.jp/alic/month/domefore/2011/aug/spe-02.htm>
- 2) 河野俊嗣(2011)宮崎県プレスリリース：口蹄疫終息宣言から1年を迎えて. <http://www.pref.miyazaki.lg.jp/parts/000165384.pdf>
- 3) 宮崎県口蹄疫復興対策本部(2011)宮崎県プレスリリース：「口蹄疫からの再生・復興方針」工程表。～再生・復興に向けたロードマップ～. <http://www.pref.miyazaki.lg.jp/parts/000159767.pdf>
- 4) 宮崎農業大学校(2011)家畜防疫日本一をめざして～口蹄疫との戦いを振り返って～. <http://www.majc.pref.miyazaki.lg.jp/kouteiekibook.pdf#search='宮崎農業大学校口蹄疫記録'>
- 5) 末吉益雄(2010)新生！川南クリーンポークへの道. ピッグジャーナル, 13(7):12-15.
- 6) 末吉益雄(2011)2010年宮崎で発生した口蹄疫について－口蹄疫発生現場での防疫業務－教訓として活かすために. 日本豚病研究会会報, 57:11-15.